羅府新報

(6)　2017年（平成29年）　6月8日（木曜日）

南加キリスト教教会連合

父と散歩して

平湯　晴彦

もしかしたら、これが父と話せる最後かもしれない。

日本の実家に滞在していた数日間、そんな気持ちがしました。父の健康状態が悪かったわけではありませんが、なぜかそう思ったのです。それで、父の散歩に同行することにしました。

朝、家を出て、歩道を歩き、信号を渡り、10分くらいして公園に着きました。グラウンドを囲む林の中に散歩道があり、木漏れ日の中を二人並んで歩きました。リハビリを兼ねての散歩なので父の歩みはゆっくりでした。

「父さんは昔、どんな子供だったの」という質問から始まって、さまざまなことを尋ねました。父の答えは新鮮でした。私が子供の頃の思い出を話すと、私の側で記憶している事と父親の記憶に微妙なずれがあることが分かり、そこで初めて父の愛に気づくことがありました。愛されていたと分かって嬉しくなりました。

それから数カ月後、父は健康なまま、自宅で就寝中に静かに亡くなりました。あの時、話しておいて良かった。そして、たくさんの「ありがとう」を言っておいて本当に良かったと思いました。

父の日がくると自分の父親を思い出しますが、同時に、私自身も三人の子供の父親なので、何か子供の役に立ちたいと思うのです。できれば、私が父親としたように、思い出話をしながら、子供の視点と親の視点の違いを伝えてあげたいと思います。場合によっては、昔を振り返って「あの時はすまなかったね」と私が謝ることが必要になるでしょう。

父親というものは子供が何歳になっても心配したり助けたりするものです。聖書では神を「父なる神」と呼びますが、まことの神とは厳しさを持ちながらも愛を注ぎ続ける父のような方なのです。

「父がその子をあわれむように、主はご自分を恐れる者をあわれまれる」（詩篇103篇13節）

（オレンジコーストフリーメソジスト教会牧師）